
天使の仮面

るーずりーふ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

天使の仮面

【NZコード】

N1728N

【作者名】

るーずりーふ

【あらすじ】

同じ日に生まれた6人の子供達。彼らは人間との関わりを絶つたために部屋に閉じこめられ、外に出ることは許されない。ある日、「天使」と呼ばれる一人だけが外に出ることを許された。自分たちの運命を呪う一人が取った行動とその先に待っているものとは・・・

・・・・・人間は、神になれるのだろうか。
答えの出ない問いかけが今日も私の頭を悩ませるのだ。

無人の孤児院にその日生まれたばかりの六人の子供たちが集められた。

子供たちはそれぞれ部屋を与えられ、ずっとそこに縛り付けられた。決して外に出ることは許されない。それは、人間との関わりを一切持てないことを意味した。

そして、十五年の歳月が流れた時、子供たちのうち二人だけが外に出ることを許された。彼らは天使と呼ばれる存在だった。孤児院の名前は、「ヘブン」。

今までの十五年間は、僕にとつて苦痛の日々だった。いや、正確にはそうではない。僕自身、それが苦痛であったことにすら気付いていなかつたのだから。毎日続く全く同じ日の繰り返し。閉じこめられることで奪われた自由。幸福のないそこで、苦痛など覚えられるわけがなかつたのだ。

しかし、外に出てみて初めてわかつた。知識だけで漠然と捉えていたあらゆるものの中の美しさや儂さを。

「空」というものを初めて見た。地上に立つて上を見上げれば見える空間。雲を浮かべ青く見える広がり。大気の塊。数百の言葉で覚えた「空」はそのどれとも違つていた。そのことに気付いたとき、今までずっと信じ続けてきたものが、ひどくくだらないもののようになってしまったのだ。ああ、僕はあの生活が嫌で嫌で仕方なかつたんだと初めてわかつた瞬間だった。

十年前、ちょうど五歳の誕生日だった。部屋に置いてある「ディスプレイ」にいつもと同じようにメアリーが現れた。彼女は、僕にあらゆることを何から何まで教えてくれる教育コンピュータだ。毎日膨大な量の知識を詰め込まれ、人間との完璧な接し方を徹底して覚えさせられた。しかし、その日彼女のスピーカーから流れてきた言葉はそういうものじゃなかつた。

「おはようございます。天使型、佐藤優斗君。今日はあなたにとって、とても重要なことを話します。よく聞いてくださいね。あなたは実験として、この施設で生活しているのです。あなたは天使を知っていますね。そう、天国に住むとされる空想上のものです。純粋な心を持っているとも言われます。今まで私がしてきたことは、あなたを天使にするための教育なのです。今まで私がしてきたことは、なればなるほど純粋な心を失っていく生き物です。そこであなたは、

生まれてから今までずっとこの部屋の中で、人間と遭遇することのないよう育てられたのです。純粋な心を守るために。十年後、あなたは新しい実験台になります。外の世界に出て、人間と関わることで、本物の天使になれたかどうかを調べるのです。そこでは私が教えた知識が役立つはずです。きっと上手くやつていけるでしょう。さあ、天使になれるようにもつと勉強しましょうね。」

僕にとってメアリーの言葉は絶対だ。いつも正しくて、役に立つことを教えてくれる。だからしつかり聞いて、理解しなければならない。そんなふうに教育されたからだ。僕は、なんの不信感も抱くことなく、このメアリーの話を理解した。そして十年後、僕はメアリーの言葉通り外へ出ることになったのだ。

私立 柳城学園。県内きつての進学校である。僕は先日ここに入学し、初めて人間という生き物を目にした。なるほど、メアリーが言つていた通りだ。みな自分と同じような造りをしていて、同じ言葉を話す。それなのに、一人一人が面白い程違つていて。僕はその違いを見極め、その人に合つた最善の接し方をすればいい。表情やタイミング、言葉の選び方、メアリーにたたき込まれたそれらを駆使して、マニコアル通りに会話をするのだ。

人は誰も僕のことを嫌がつたりしない。みんな僕と話をしたくてしょうがないらしい。

それはそうだ。僕はその人だけの完璧なマニコアルに従つて話をするんだから。状況にあつた表情を作り上げることもできる。一緒にいたら楽しいに決まつていて。「こんなに自分のことを分かつてくれる人に初めて会つた。」と、もつ何人にも言われた。必要とされるのは悪い気がしない。

僕は毎日をしつかりと同じように消費していけばいいのだ。どうせこれはただの実験。今までの延長線なんだから。

でも、少し欲が出てしまつたのかも知れない。実験体の僕が、実験しようと思いついた。

帰り道、いつもは何気なく僕を抜き去っていく彼女に声を掛けた。横を通り過ぎた彼女が振り返る。

「何?」

明らかに不審そうな表情を浮かべる。

まあ、当然の反応だ。ここは笑顔で乗り切るのが最善の方法だろう。

「いきなり声をかけたりしてすみません。ちょっと話したいことがあつたから。」

それでもまだ彼女の表情はかたい。

あともう少しどうしたところか。一回引いてみるのもいいかもしない。

視線を三十度落とし、残念そうな表情を作り出して言う。

「やつぱりダメですか・・・。どうしても聞いて欲しかったのに。」
すると、明らかに彼女が困惑しているのが分かつた。いい手応えだ。ここがベストタイミングであることは間違いない。

「もしよかつたら、聞いてもらえませんか?」

上目遣いが彼女の視線とぶつかった。

数秒後。

「・・・わかったわ。こんなところじゃなくて公園にでも行かない?」

成功だ。僕はしつかり笑顔をサービスした。メアリーから教えられた最上級の笑顔だ。

「ありがとう。」

私は自分に暗示を掛ける。

自分で作り出した人格に入り込んでしまうのだ。そうすれば、思つてもいいようなことがすらすらと口から出ていくようになる。どんなことがあっても自分を保っていられる。「多重人格」そう呼んでもいいかもしれない。

これが、唯一のコミュニケーション源であるメアリーから教わったことだった。どんな人にもこの技は使えたし、そのおかげで誰にでも必要とされる存在になつた。それがいいのか悪いのかは別にして。

例えば大嫌いな人が現れたとしても、「私はこの人の親友なんだ」と暗示を掛ければ、いかにもそれらしく振る舞うことができた。

例えば「私はリーダーに向いてるんだ」と暗示を掛けば、学級委員になることもできた。

私はいろいろな人に会う度にころころと性格を変えていた。それはわずかな違いでしかないから、誰も私の本性に気付く人なんていなかつた。

でも、これが通用しない相手が現れた。

「ちょっと、いいですか？」

帰り道、いつもは何気なく抜き去つていく男子生徒から声を掛けられた。

「何？」

いたつて冷たく、不審を隠さずに聞いた。こんなふうに声を掛けられた時、いいことがあつた試しがない。興味のないふりをするのが一番だ。

「いきなり声をかけたりしてすみません。ちょっと話したいことがあつたから。」

またか。もう何人の男子生徒からこの言葉を聞いてきたことだろ
う。この次は必ず「好きでした」とか「付き合ってください」と続
いていくのだ。

私が黙っていると、彼はいかにも残念だという表情で言った。
「やっぱりダメですか・・・。どうしても聞いて欲しかったのに。」

明らかに落ち込んだ様子の彼。

私は焦った。こんなところで敵を作るわけにはいかない。
「もしよかつたら、聞いてもらえないか?」

上目遣いがじつとこっちを見ている。

正直、告白にはうんざりだ。暗示のかけ方が難解で、下手をした
ら解けなくなりそうになる。

でも、人間から嫌われたままこの世界で生きていこうとは難しい
とメアリーが言っていた。

話を聞く前から断つたりしたら私の評判はがた落ちするに違いな
い。少しずつ、この環境が生きにくいものになっていくだろう。

結局私はこう答えるしかないのだった。

「わかったわ。こんな所じやなくて公園にでも行かない?」
そして・・・

「ありがとう。」

私は驚愕した。

彼は満面の笑みで微笑んだのだ。この表現に間違いはない。

満面の微笑み。それは、私がメアリーにたたき込まれた究極の口
ミニケーション「エンジェルスマイル」とまったく同じものだつ
た。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1728n/>

天使の仮面

2010年10月17日02時43分発行